

「大統領閣下、明瞭な措置を乞う」

このような短文電報を金山は朴大統領に送った。直訴状であった。国の責任者として最高の対応がとれるのは唯一大統領だけである。自分が真摯に願っている親善増大への願いを朴大統領は日頃から汲み取っている、と金山は確信していたからこそこの手段に訴えた。

七三年八月の金大中事件は朝鮮総連に唆かされた文世光による陸英修暗殺事件につながり、さらに中央情報部長金載圭が朴大統領を暗殺するという一連の悲劇的な諸事件の発端を為すものではなかったろうか。

朴大統領が老いを深めている。後継者作りが急務となると発言した尹必銷首都防衛司令官が朴正熙の激怒を招いたのはつい先日の出来事だった。大統領の政敵金大中に一泡ふかせば名誉挽回につながるだろうと夢想した李厚洛が企んだ拉致事件だったのである。

金大中は神戸から出港した工作船に乗せられ何度も日本海に突き落とされる危険にさらされた。米軍用機による威嚇などで殺し損ねたというべきだろう。

金載圭中央情報部長は、チビで朴正熙の腹心とされる車智テツ(三三)に徹の作りし警護室長の策略で左遷させられると疑惑の念を募らせていたといわれる。車のために自分が権力中枢から追われるのではないのか。

崔書勉にどうして金載圭は大罪を犯すにいたったのか、質問した。

「私が知っていることは、金は噂を気にし、しかも病んでいたということだ。何処かの軍司令官に発令されるという噂を耳にし、前途に絶望感を抱いた。そのようなことが起こる前に始末をつけてしまおうと考えたようだ」

大統領と会食中、金は朴正熙と相伴にあずかった車の二人をピストルで射殺した。彼はその後国防部に逮捕された。以上

本ページは『韓国研究の魁 崔書勉』の追加変更部分である。